

# 地域活性化の門を開くカギ

平成4年5月12日付 新潟日報

辞書で「活性」という言葉を引いてみた。「物質のある機能が活発になること」とある。近年、盛んに唱えられている「地域活性化」を辞書流に意味付けると、地域に伏在しているエネルギーを引き出して育て、生き生きとした生活空間をつくり出すことと、うあたりになるのではなからうか。

地域活性化への動きは全国的な広がりを見せている。自治省が先に「活力のあるまちづくり」の優良団体として表彰した町村の実績を見ても、生き生きとした生活空間づくり懸命に取り組んでいる各地の息づかいを感じ取る事ができる。

「たくみの里」づくりを進めている群馬県の新治村では、伝統の手工芸を体験できる匠(たくみ)の家を村内七カ所に造り、観光客の人気を集めている。

兵庫県千種町は、雪のない時期のスキー場を活用してパラグライダーの技術指導や星空コンサートを実施している。

宿場町として栄えた静岡県の金谷町では歴史と文化を素材にした町づくりの一端として、住民が持ち寄った石を使って石畳の復元を進めている。同町の場合、二十代から八十代までの住民から公募の形で組織した「まちづくり百人委員会」が町に提言を行うなどユニークな活動を展開している。

「地域活性化大賞」には、第一回にもかかわらず二十一件の応募があった。手を挙げた各組織、グループの軌跡は、地域活性化への手がかりを示唆するものがある。先日、行われた審査の結果「大賞」に選ばれた三つのグループの足取りを見ても、それぞれに「なるほど」と思わせるユニークさを持っている。

その一つ、奇祭といわれる「ほだれ祭」の復活に取り組んだ栃尾市下米伝の青年グループの場合、祭りを通じて地域住民のエネルギーを結集する役割を果たした。地域文化の再発掘を進めている小園町の「小園芸術村友の会」は、外への力を地域活性化に生かすという面で新しい道を開いた。

地域内の巨木、銘木の調査、記録に

取り組んでいる新潟市造園建設業協会の活動は、日々何となく見過ごされがちで地域の姿を改めて見直す足がかりとなった。「大賞」から漏れたその他の応募団体もそれぞれに、その地域ならではの活動に取り組んでいる。

活動の熱度や成果の表れ方などではばらつきも見られるものの、こうした取り組みを進めること自体に大きな意義がある。それが地域のあしたを開く第一歩にもなると思う。

生かせ住民の知恵と力

もちろん、市町村や集落レベルでの地域活性化を図っていくうえで、県の政策や施策も一つの大きな前提となる。場合によっては民間企業がかかわってくることもある。

地域を取り巻く条件もまた千差万別だが、共通項として引くくって言えるのは、何よりも必要なのは地域住民自身の知恵と力というところだろう。

そのためには、まず住民自身が住んでいる地域の特色を把握する必要があり、それを生かしていく道を探る必要がある。そして、具体化し、実行に移していく。こうしたことの積み重ねが、初めて地域活性化に向けての新しい道も開けてくる。

現在は、山里の春を告げる祭りとして定着している栃尾市のほだれ祭も、「地域の衰退を食い止める方法はないか」という危機感を持った青年たちの車座になっての話し合いが復活への糸口となった。話し合いを重ねる中で地域活性化への足場として選んだのが、百年前からあったと伝えられている祭りの復活だった。

最大の収穫は、地域の連帯意識の深まりだった。参拝客も年間を通じて訪れるようになった。地域住民の主体性を持った内発的な努力が新しい道を開いたと言えよう。

地域活性化に向けての取り組みは県内でも各地で進められている。ここでは

あしたへの第一歩

地域活性化の門を開く第一のカギは、地域そのものの中に潜んでいるのではなく、

ではなからうか。